

論 文

内集団・外集団成員の同意・不同意に伴う  
情緒的反応の差異および社会的投射の媒介作用の検討

吉 原 智恵子

日本福祉大学 教育・心理学部

**Differences in emotional responses and mediation of social projection caused  
by the agreement or disagreement of in-group and out-group members**

**Chieko YOSHIHARA**

Faculty of Education and Psychology, Nihon Fukushi University

Keywords：情緒的反応，社会的投射，内集団成員，外集団成員

要旨

本研究は、心理的距離の異なる2つの集団成員が示す同意・不同意状況を設定し、各状況下で喚起される情緒的反応の差異を検討するとともに、社会的投射 (social projection) と情緒的反応との関係についても探索的な検討を行った。大学生64名を対象として質問紙を用いた実験を行い、内集団・外集団に関与性の高い話題に関する意見測定と両集団成員の合意推定値 (%) を測定し、これに加えて各集団の同意・不同意状況下における情緒的反応等を測定した。その結果、対象集団の違いに関わらず、同意は自己の意見に対する自信を向上させ、不同意は自信を低下させることが示された。また両集団からの不同意は不安を高め、特に回答者に関与性の高い話題においてその傾向が強まることが示された。さらに対象集団に関与性の高い話題について当該集団成員から同意が得られる場面では、社会的投射が自信を向上させる傾向が示されたことから、社会的投射は自己意見の妥当性を強化させる作用があることが示唆された。

我々の日常生活は、意思決定や判断が求められる場面に満ちている。天気予報が予測する確率を見て傘を持っていくべきか否かを判断し、また車を運転する際には道路の混み具合を予想して目的地までのルートを変更する。このようなとき、我々はできるだけ妥当な判断をしたいと動機づけられる (Festinger, 1950)。もし適切な判断を誤るなら、雨でずぶ濡れになることや、交通渋滞にはまり、約束の時間に目的地に到着できないなど、何らかの不利益を被ってしまうことは明らかである。晴れ

間が見える中、自分と同じように傘を持っている見知らぬ他者が目に入ると何となく安心するということがある。Festinger (1950) は、ものの長さや重さの判断のように物理的な基準に依拠することができる物理的実在性 (physical reality) に基づいて正確な判断を行うことができない場合には、社会的実在性 (social reality)、すなわち他者はどのように判断しているかという情報に依拠して自らの判断の妥当性を確かめることを予測している。社会生活における私たちの判断は、社会的実在性

に依存し、影響を受けることが少なくない。

社会的投射 (social projection) とは、自分自身の特性や態度、行動の選択を他者や集団に重ねて認知することであり、自分自身との類似性を他者に期待する一連の過程を指している (Kruger, 2000; Machunsky, Toma, Yzerbyt, & Corneille, 2014; Robbins & Krueger, 2005)。これまでの多くの研究において、社会的投射は内集団成員に対して生じ、外集団成員に対しては生じないもしくは内集団成員に対する社会的投射より小さい水準で生じることを示してきた (e.g. Clement & Krueger, 2002; Jones, 2004; Robbins & Krueger, 2005)。例えば Jones (2004) は、知覚される社会的距離 (PSD : perceived social distance = 親しみやすく相互作用が容易であることや全般的な類似・共通性) が社会的投射を媒介しており、内集団成員の PSD は外集団成員の PSD より近く、特定の観点 (意見など) を共有化しているとの推測につながることから、社会的投射は内集団において生じることを実験により明らかにしている。なお社会的投射の測定は、対象となる集団成員のうちどのくらいの割合 (%) が回答者自身の意見に同意するかを問うことに基づき、合意推定値として測定される。

しかし、これらの研究結果とは異なり外集団成員に対する社会的投射が生起することを示す研究もある。例えば Clement & Krueger (2002) は、外集団への社会的投射はゼロ付近になることを支持する 2 つの実験結果が得られた一方で、外集団に評価的価値 (成績の良さ) を付与した実験では、より評価の高い外集団への社会的投射が見られたことを示している。この結果は、実験参加者の所属性としての社会的カテゴリー化が十分に顕在化されていない集団状況下において、自己評価が低下するという脅威に晒された場合に、より価値の高い集団への自己防衛的な社会的投射が生じたものと解釈された。田村 (2011) もまた、地位格差を伴う 3 集団 (回答者の属性に応じて入れ替わりとなる内集団・外集団および全体集団) への合意性推定値を測定し、社会的投射は社会的地位者が現状を肯定・維持する装置として作用するのではないかと指摘している。具体的には、社会的により高い地位集団に属する成員は、望むかどうかの意図とは無関係に、現状を肯定・維持するため、外集団や全体集団に自己判断の社会的投射を行うのに対して、より低い地位集団に属する成員は、自己が属する内集団への

投射が大きく、外集団への投射はほとんど行われなことが示された。このことから、低地位集団の成員は、集団間の境界に敏感に反応しているのではないかと考察された。以上の例は、たとえ外集団として位置づけられる集団であっても、自己の評価を肯定するためあるいは現状を肯定するために積極的に外集団へ自己を投射することを示していると考えられる。また Yoshihara, Takamatsu, & Takai (2018) は、外集団に課題の関与性が高い社会的トピックについては、内集団成員よりも外集団成員に大きな社会的投射が生じ得ることを示し、社会的投射は PSD ではなく課題の関与性に依りて規定されることを示している。このことは課題の関与性の高い集団成員との合意を推定することにより、自己の持つ意見の妥当性の強化を見込めることが、その基盤にあると考えられるだろう。

以上の研究は、社会的投射が自己防衛的動機付けや自己高揚的動機付けにより生起されることを示している。これらの研究を総合すると、対象集団への社会的投射が自己評価に関わる肯定感を低下させる状況下においては、内集団に対しても社会的投射を減少させ、逆に高揚させる状況下においては外集団への社会的投射を増加させることが予測できる。

また、Yoshihara et al. (2018) において見られた外集団への社会的投射は、Goethals & Nelson (1973) による三角測量効果 (triangulation effect) とも一致する。意見は、何が正しいかという点に関心が向かう所信 (belief) と、個人の好み (preference) など主観的な価値意識 (value) が重視されるものに分けて考える必要がある (Goethals & Nelson, 1973; Goethals & Klein, 2000)。真理の推測に関わる所信について非類似他者と意見の合意が得られるならば、類似他者との間で共有化される個人的特性バイアスの影響による合意とみなすことはできないことから当該所信のもつ本質的特性についての合意が得られたものと解釈することができ (Kelley, 1967)、妥当性の確信が強化されることを予測できる (= 三角測量効果)。Yoshihara et al. (2018) が実験で使用した意見 (Table 1) は、個々の好みを尋ねるものではなく、何がより正しいか (妥当であるか) を尋ねる所信に分類される。また社会的トピックについて関与性が高い一般会社員へ学生からの社会的投射がみられたことは、社会的問題に対して知識や経験を多く持つ社会人の判断と同意である場合には自分自身の判断の妥当性

を高め、外集団成員である一般社員との合意が自信に結びついた可能性がある。

以上から、内集団への社会的投射と外集団への社会的投射は、異なる心理的過程がその基盤にあると考えることができるだろう。SNSやツイッターなどを介して、心理的に近い他者ばかりではなく心理的に距離のある他者とのコミュニケーションも日常に混在する今日において、それぞれの「他者」は異なる心理作用をもたらすと考えられるだろう。本研究は、内集団および外集団成員の同意・不同意状況において、これら状況間の違いに応じて喚起される情緒的反応の差異を検討し、さらに内集団および外集団成員への社会的投射について、その心理的作用の一端を明らかにすることを目的とする。

Suls, Martin, & Wheeler (2000) は、自分の意見や判断を決定する際、どのような他者を比較対象として選択するかについて、「好みの評価 (preference assessment)」、「所信の評価 (belief assessment)」、「好みの予測 (preference prediction)」という3つのパターンを分類し、意見比較の三者モデル (the triadic model of opinion comparison) を提唱した。このモデルにおいて「好みの評価」は、個人的な好ましさに関する評価を下す際の比較対象として、当該の問題に関連する属性が類似した他者をもっとも強い影響力をもつことを予測する。また「所信の評価」は、何が正しいかという真理にかかわる評価を行う際に、基本的な価値意識を共有しながらも自分より優れた知識や経験をもつという点で非類似性を示すエキスパートが強い影響力をもつことを、さらに「好みの予測」は、過去の好みのパターンが一貫している他者が比較対象として重要な影響力をもつことを予測する。

また Orive (1988) が行った実験では、比較を行う他者との類似性を犯罪と刑罰に関する意見測定を利用して操作し、これらの類似、非類似他者と、意見の合意性を操作する条件として同意・不同意・比較情報がない統制群の3条件を設定して確信度や比較対象への好意度、ストレスレベル、怒りや驚きなどの感情の差異を調べた。その結果、類似他者との同意は潜在的に仮定されることから自信の増加は見られないのに対して、類似他者との不同意は自信を低下させることが明らかになった。一方、非類似他者との同意は自信を増加させ、三角測量効果を支持する結果が示された。

以上から、外集団成員の同意は三角測量効果から、確

信度を強化すること、また内集団成員の同意は潜在的に推測されることとして確信を強化する影響力は弱いのに対し、不同意は確信度を低下させる影響力をもつことが予測される。そこで本研究では、Yoshihara et al. (2018) の実験を踏まえ、外集団成員の同意は確信度を強化すること、また内集団成員の不同意は確信度を低下させる影響力をもつことに焦点を当てて検証を加える。なお Yoshihara et al. (2018) は社会的投射の課題内容として対象集団の関与性の高さを操作している。回答者である学生に関与性が高い身近なテーマについては、学生が判断しやすいテーマであり、上記先行研究を踏まえた予測が成立すると考えられる。一方、学生にとっては関与性が低く一般社員により関与性が高いテーマについては、上記予測と同様に三角測量効果をもたらすことに加え、さらに関与性が高い集団成員からの同意であるということから妥当性の根拠が強まり自信を強化することが考えられる。また学生にとって関与性が高く一般社員に関与性の低いテーマにおいて学生集団が不同意を示す場合には、身近なテーマであるだけに自信を失い、不安を高める可能性が考えられる。心理的距離の近い他者から同意が得られる状況は、一般に排斥を回避することができるため安心感を得ることができるのに対して、同意が得られない場合には不安が喚起されることが予測される。この傾向は、身近な話題において身近な集団成員からの不同意が得られる場合により明確に表れるであろう。そこで本研究では、内集団、外集団成員からの同意・不同意状況を設定し、各状況下における自信と不安の感情について、以下の仮説に焦点を当て、考察することを1つ目の目的とする。

仮説1. 外集団成員の同意は確信度を強化するだろう。またその傾向は、内集団の同意に対する確信度より強くなり、外集団成員に関与性が高い場合に顕著になるだろう。

仮説2. 内集団成員の不同意は確信度を低下させるだろう。またその傾向は、外集団の不同意に対する確信度より強くなり、内集団成員に関与性が高い場合に顕著になるだろう。

仮説3. 内集団成員の同意は安心を、不同意は不安を喚起するだろう。またその傾向は、外集団の同意・不同意に対するより強くなり、内集団成員に関与性が高い場合に顕著になるだろう。

また以上の検討に加え、合意性の推定により自己の意

見を対象集団に投射する際、心理的距離が異なる対象に喚起される情緒的反応の差異を探索的に調べ、社会的投射と情緒的反応との関係について考察することを2つ目の目的とする。

## 方法

### 実験参加者

日本福祉大学学生69名が実験に参加した。ただし、回答不備および本実験の前提となる学科への所属性の認知に関する得点が低かった実験参加者（後述する2項目平均2.0以下であったケース）を除く、64名（男性33名、女性30名、不明1名）を分析対象とした。平均年齢は19.3歳（ $SD=0.53$ ）であった。本研究は子ども発達学部「心理学実験・実習／心理学実験」の受講者を対象として、実験演習課題として実施した実験データに基づき報告する。

### 質問紙実施の手続き

質問紙はPart1, Part2の2部で構成され、Part1を終了した実験参加者から回答済み質問紙を回収し、続いてPart2を配布して実施した。全実験参加者にPart1の質問冊子を配布後、実験概要や回答の進め方を説明した。また説明には以下の内容も加えた。この調査は大学生の社会的態度と合意性の推定について調べるためのものであり、無記名で回答を行い、データは統計的に処理されることから個人は特定化されないこと、また本データを授業や研究以外で利用することは一切ないことを説明した。またその際、今後学会や論文として実験結果を公表する可能性があることについての了承を得た。さらに回収した質問冊子は厳重に管理し、データ入力後にシュレッダーにて処分を行うことについての説明を行った。その後、質問がある場合は挙手するように伝え、各自のペースで回答を進めるように教示した。実験終了後、本実験の内容に関する説明を講義において行った。

### 質問紙の構成

Part1 初めに所属専修をたずね、続いて学科（あるいは専修）に進学した理由と、4年間の学びに期待すること、同学科生に共通すると思われる特徴、の3点について自由記述を求めた。この記述作業により、所属学科を内集団として意識化する方向づけを行った。次に学科に所属することについての肯定感を測定するため、「他

の学科ではなく、この学科に入って本当によかったと思う」、「この学科は学びやすいところだと友人に自慢できる」という2項目（5件法）により回答を求めた。続いて学生にとって身近な話題（以下「学生トピック」）3項目、社会的な話題（以下「社会的トピック」）3項目について意見の測定（8件法）を行い（Table 1）、さら

Table 1. 意見測定項目

① 宇宙には別の生命体が存在する。
② 新年会はすたれていく（流行らなくなっていく）だろう。
③ ホームレスに対する政治的支援はもっとなされるべきである。
④ 学生はもっと本を読んだほうがよい。
⑤ 夫婦別姓は認められるべきである。
⑥ 大学のすべての授業を自由選択にしたほうがよい。

にこれらの意見に対する妥当性の確信度（5件法）を測定した。これらの意見測定項目はJones（2004）が使用した4つの意見をもとに日本人の大学生用に一部修正を加え、身近な話題と社会的な話題（Yoshihara et al., 2018の分類基準による。）を加えたものであった。ここで半数の回答者は学生トピックおよび社会的トピック計6項目について、内集団成員（同学科の学生）の合意推定値（自分の意見に同意するとの予想割合）を0から100までのパーセンテージで回答した。また同学科生の90%以上が自分の意見に不同意だった場合に感じる気持ちを学生トピック1項目（「大学のすべての授業を自由選択にしたほうがよい」）もしくは社会的トピック1項目（「学生はもっと本を読んだほうがよい」）について自由記述による回答を求めた（カウンターバランスをとるため、後述する同様の質問をセットとして半数ずつの割り振りをした。）。その後内集団成員に対するPSDを測定するため、Jones（2004）が使用した6項目により（Yoshihara et al., 2018による翻訳版）、8件法で測定した（Table 2）。これに続いて外集団成員（一般社員）を対象とする場合の合意推定値も内集団と同様に測定した後、一般社員の90%以上が自分の意見に同意した場合に感じる気持ちを学生トピック1項目もしくは社会的トピック1項目（ともに上記と同じ項目を使用。カウンターバランスによりどちらか未回答であったトピックへの回答となる。）について自由記述による回答を求めた。その後、外集団成員に対するPSDを上記と同様に6項目で測定した。残り半数の回答者は外集団成員に対する測定に続いて内集団成員の測定を



Table 2. PSD 測定項目

① 私は（現在も過去も）○○ <sup>a)</sup> とほとんどあるいはまったく接触がない。
② 一般的に、私は○○とうまくやっている、あるいはやっていけると思う。
③ 一般的に、私は○○と共通するものはほとんどないと思う。
④ 一般的に、私は○○と類似したものの見方をしていると思う。
⑤ 私は、平均的な○○と協調していくことは難しいと思う。
⑥ もし私がコンパで○○と会ったら、ほとんどの場合、彼／彼女と一緒にいて心地よく感じると思う。

a) ○○には「同学科生」もしくは「一般会社員」が入る。

行い、回答のカウンターバランスをとった。ここまでする Part1 とし、回答済みの冊子を個別に回収した後、Part2 の冊子を配布した。なお感情の自由記述については回答者の負担を考慮し、内集団成員の不同意および外集団成員の同意場面のみ焦点をあてて回答を求めた。

Part2 学生トピックおよび社会的トピックに対する各対象集団（内集団／外集団）の同意状況（同意／不同意）による情緒的反応の差異を測定するため、Table 3 に示す 6 項目に対して「まったく感じない」から「とても感じる」までの 5 件法による測定を行った。話題 (2) × 対象集団 (2) × 同意状況 (2) の計 8 状況に対して、内集団先行と外集団先行の回答順序 (2) を組み合わせることにより計 16 パターンの質問冊子をランダムに実験参加者に割り当て、回答のカウンターバランスをとった。また回答者の負担を考慮し、学生トピックは学生生活に関わる「大学のすべての授業を自由選択にしたほうがよい」、社会的トピックは学生の読書離れを扱った「学生はもっと本を読んだほうがよい」の各項目とした。

## 結果

### 内集団・外集団成員への PSD

内集団、外集団それぞれに対する PSD 得点を求めるため、得点が高いほど心理的距離が近く、親密さや全般的類似性を感じていることを示すように逆転項目を変換し、各集団に対する 6 項目の回答を合計した。両集団に対する PSD 得点には有意差が見られ ( $t(63)=6.26, p=.000, d=0.78$ )、内集団への PSD 得点は外集団への PSD 得点より有意に高く、内集団成員への心理的距離 ( $M=32.45, SD=7.33$ ) は外集団成員 ( $M=26.22, SD=7.96$ ) に対する心理的距離より近いことが確認された。

### 情緒的反応の分類

Table 3 の 6 項目について、対象集団（内集団／外集団）、同意状況（同意／不同意）、話題（学生トピック／社会的トピック）の組み合わせによる状況別に最尤法、プロマックス回転による探索的因子分析を行った。その結果、すべての状況に同様な固有値の減衰状況が見られ、共通する 2 因子が抽出された。Table 3 は 1 例として、学生トピックについて学生の 90% 以上が同意する状況下での結果を示している。第 1 因子は「不安になる」、「心細い」、「弱気になる」の 3 項目の因子負荷量が高く（すべて .60 以上）、「不安」と命名した。第 2 因子は「自信になる」、「確からしく感じる」、「ほっとする」の 3 項目の因子負荷量が高く（すべて .70 以上）、「自信」と命名した。ただし学生トピックについて学生の 90% 以上が不同意な状況についてのみ、「確からしく感じる」という項目の因子負荷量が第 1 因子、第 2 因子ともに .20 以下と低い値であった。

Table 3. 感情測定に対する探索的因子分析の結果 (学生トピック・同学科生同意状況)

	F1	F2
<b>不安</b> ( $\alpha=.86$ )		
不安になる	.96	-.03
心細い	.84	.04
弱気になる	.67	.01
<b>自信</b> ( $\alpha=.85$ )		
自信になる	-.01	.91
確からしく感じる	-.01	.79
ほっとする	.04	.73
因子間相関		-.15

### 話題×対象×賛否による情緒的反応の差異

#### (1) 自信

上記因子分析結果に基づき、自信因子の尺度得点 (3

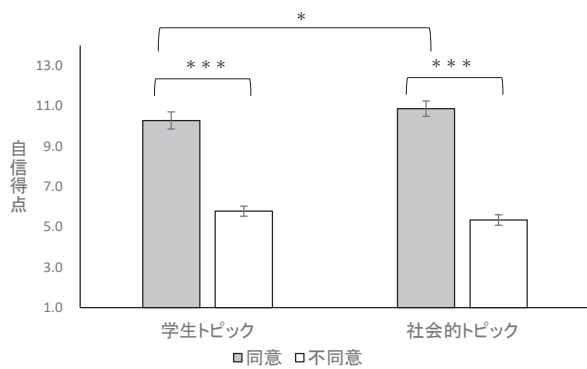


Figure 1. 話題と同意状況との交互作用 (自信得点)

\* $p < .05$  \*\*\* $p < .001$   
注) エラーバーは標準誤差

項目計) を従属変数として、話題 (学生トピック/社会的トピック) × 対象 (学生/一般社会人) × 同意状況 (同意/不同意) のすべて対象内要因計画による分散分析を行った。その結果、同意状況の主効果が有意となり ( $F(1,63)=132.94, p=.000, \eta_p^2=.68$ )、対象者の多数が同意の態度を示す場面では不同意の態度が示される場面より自信得点が高いことが示された。また話題×対象の交互作用および話題×同意状況の交互作用が有意であった (順に  $F(1,63)=6.08, p=.016, \eta_p^2=.09$ ;  $F(1,63)=6.68, p=.012, \eta_p^2=.10$ )。話題×同意状況の交互作用について単純主効果検定を行ったところ、両話題において同意の態度が示される場面では不同意の態度が示される場面より高い自信をもつ一方 (学生トピック:  $F(1,63)=87.00, p=.000$ ; 社会的トピック:  $F(1,63)=136.49, p=.000$ )、同意状況下では社会的トピックのほうが学生トピックよりも有意に高い自信をもつことが明らかになった ( $F(1,63)=5.24, p=.025$ ; Figure 1)。また話題×対象の交互作用について単純主効果検定を行った結果、学生が同意・不同意を示す対象であった際には学生トピックより社会的トピックに対して自信を高くもつ傾向が示された ( $F(1,63)=2.87, p=.095$ )。

## (2) 不安

自信に対する分析と同様に、不安因子の尺度得点 (3項目計) を従属変数として話題 (学生トピック/社会的トピック) × 対象 (学生/一般社会人) × 同意状況 (同意/不同意) の3要因対象者内計画による分散分析を行った。その結果、同意状況の主効果が有意であった ( $F(1,63)=81.78, p=.000, \eta_p^2=.57$ )。対象者の多数が不同意の態度を示す場面では同意の態度を示す場面よりも

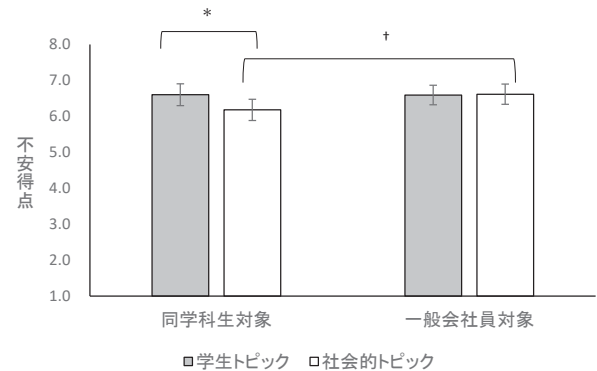


Figure 2. 話題と対象集団との交互作用 (不安得点)

† $p < .10$  \* $p < .05$   
注) エラーバーは標準誤差

不安が高くなることが示された。また話題×対象の交互作用が有意であった ( $F(1,63)=4.54, p=.037, \eta_p^2=.07$ ; Figure 2)。話題×対象の交互作用について単純主効果検定を行ったところ、学生が対象であった際に話題による有意差が見られ ( $F(1,63)=4.75, p=.033$ )、学生トピックより社会的トピックのほうが不安感情を低下させることが示された。また社会的トピックにおいては、同意・不同意を示す対象が学生であるほうが、一般会社員であるよりも不安が低下する傾向が示された ( $F(1,63)=3.28, p=.075$ )。

## 自己意見に対する事前確信度と合意推定値との相関

Krueger & Zeiger (1993) の指摘に基づき、合意性推定値は実際の合意分布の影響を受ける可能性があること、また推定の天井効果や床効果を避けるため、意見の賛否が20%以下、80%以上に偏る意見項目については除外することとした。意見1, 4, 5はこの基準により除外項目に該当する (賛成意見の割合: 意見1から順に90.6%, 87.5%, 81.3%)。ただし社会的トピックに対応する意見4および5の両項目を除外する場合、社会的トピックに関する分析項目が1項目になることから、データの信頼性への影響を考慮して、相対的に偏りの少ない意見5については分析対象とした。以上から、学生トピック2項目と社会的トピック2項目について、同学科生と一般会社員を対象とした合意推定値と自己の意見に対する確信の強さとの相関係数を求めたところ、意見2を除き、有意な正の相関が得られた (Table 4)。したがって意見6, 3, 5に対する事前確信度が高いほど同学科生および一般会社員への合意推定値が高く、自

Table 4. 自信と合意推定値との相関係数

項目	同意対象	同意対象	
		同学科生	一般会社員
学生	2	-.05	.02
トピック	6	.53 ***	.41 ***
社会的	3	.35 **	.53 ***
トピック	5	.33 **	.43 ***

\*\* $p < .01$  \*\*\* $p < .001$ 

己の意見を投射しやすいことが示唆された。

自己意見に対する事前確信度, PSD, 合意推定値の大きさが情緒的反応に与える効果

自信得点, 不安得点のそれぞれを目的変数として, トピックの種類(学生トピック/社会的トピック)と合意推定対象者(同学科生/一般会社員), 同意状況(同意/不同意)を組み合わせた状況別に自己意見に対する事前確信度, PSD, 合意推定値を説明変数とする重回帰分析を行った。Table 5は自信得点を目的変数とした結

果を示している。学生に関与性の高い学生トピックについては, 同意が得られる場面ではどちらの対象においても合意推定値の標準偏回帰係数( $\beta$ )が有意であり, 学生が対象の場合にはさらに PSD も有意であることが示された。したがって内集団, 外集団を問わず同意が得られる場面においては対象集団成員への社会的投射は自信を高める作用があり, さらに内集団成員に対しては心理的距離の近さも自信を向上させることが示唆された。また社会的トピックについては, 同学科生からの同意が得られる場面において学生への PSD は有意な効果が見られ, また一般会社員を対象とした場合には有意な効果は見られなかったが, 合意推定値については有意傾向を示す結果が得られた。

上記自信得点の分析と同様の説明変数に対して, 不安得点を目的変数とした重回帰分析の結果を Table 6 に示す。学生トピックについては, 同学科生の多数が同意する場面において事前確信度と同学科生への PSD が有意な負の効果をもち, 不安を下げるように作用することが示された。さらに事前確信度は, 同学科生の多数が不同

Table 5. 「自信」に対する重回帰分析結果

	PSDおよび合意推定の対象							
	同学科生				一般会社員			
	同意( $\beta$ )	SE	不同意( $\beta$ )	SE	同意( $\beta$ )	SE	不同意( $\beta$ )	SE
事前確信度	-.13	.40	.01	.25	.08	.41	-.05	.31
学生 合意推定値	.46 ***	.02	-.03	.01	.33 *	.02	.06	.02
トピック PSD	.32 **	.05	-.16	.03	.13	.05	.03	.04
調整済み $R^2$	.25 ***				.13 *			
事前確信度	.18	.45	.04	.34	.04	.57	-.19	.41
社会的 合意推定値	-.02	.02	-.10	.01	.28 †	.03	.04	.02
トピック PSD	.28 *	.05	.01	.04	.02	.06	.11	.04
調整済み $R^2$	.09 *				.05			

† $p < .10$  \* $p < .05$  \*\* $p < .01$  \*\*\* $p < .001$ 

Table 6. 「不安」に対する重回帰分析結果

	PSDおよび合意推定の対象							
	同学科生				一般会社員			
	同意( $\beta$ )	SE	不同意( $\beta$ )	SE	同意( $\beta$ )	SE	不同意( $\beta$ )	SE
事前確信度	-.29 *	.24	-.28 †	.49	-.17	.31	-.22	.46
学生 合意推定値	.15	.01	.18	.03	-.02	.02	.27 *	.02
トピック PSD	-.28 *	.03	.10	.07	-.07	.04	.21 †	.06
調整済み $R^2$	.09 *				.07 †			
事前確信度	-.31 *	.21	-.22 †	-.22	-.17	.40	.02	.64
社会的 合意推定値	.04	.01	.27 *	.27	-.11	.02	.05	.03
トピック PSD	-.20	.03	.13	.13	-.03	.04	.03	.06
調整済み $R^2$	.12 *				.02			

† $p < .10$  \* $p < .05$

意な場面においても負の効果をもつ傾向が見られた。一方、一般社員が不同意な場面では一般社員への合意推定値に有意な正の効果が見られ、不安を高めることが示された。また一般社員への PSD は有意傾向を示した。社会的トピックについては、同学科生の多数が同意する場面において、事前確信度が負の有意な効果を持ち、不同意な場面では事前確信度は負の有意傾向を示した。さらに同学科生が不同意な場面では同学科生への合意推定値が有意な正の効果を持ち、不安を高めることが示された。一方一般社員を対象とする場面については有意な効果は得られなかった。

### 感情の自由記述に対するカテゴリー分類

同学科生の90%以上が自己の判断に不同意だった場合および一般社員の90%以上が同意した場合に喚起される感情の自由記述データに対して筆者が「無感情」から「複雑」までの13カテゴリーを設定し (Table 7), 筆者および経営学を専攻する研究者1名が独立に回答データを分類した。2名の分類の一致度は、学生トピックで同学科生が不同意の場面では0.97、社員が同意する場面では1.00、社会的トピックで学生不同意の場面では0.96、社員が同意する場面では0.93となり高い一致度が見られた。2名の分類が不一致となった少数のデータについては協議を行い、合意に達したカテゴリーに分類したため、最終一致度は1.0となった。また13カテゴリーをさらに「無反応」、「認知的反応」、「感情的反応 (快)」、「感情的反応 (不快)」の上位4カテ

ゴリーに集約し、これらと4場面 (話題×同意状況) を組み合わせた4×4のクロス表について $\chi^2$ 検定を行った。その結果度数には有意な偏りが見られた ( $\chi^2(9)=67.02, p=.000$ )。残差分析の主要な結果としては、学生トピックについて同学科生が不同意する場面では、納得しようとしたり自分の意見が揺らぐなどの認知的反応が有意に多く ( $R_{adj}=2.72, p<.01$ )、不快感情が喚起されやすい ( $R_{adj}=1.95, p<.10$ ) が示された。社会的トピックについて同学科生が不同意する場面では、同様に不快感情が喚起されやすいことが示されたが ( $R_{adj}=3.64, p<.01$ )、認知的反応については有意には至らなかった。学生トピックについて一般社員が同意する場面では「無反応」および「感情的反応 (快)」の回答が有意に多く (順に  $R_{adj}=3.42, p<.01$ ;  $R_{adj}=3.31, p<.01$ )、「認知的反応」および「感情的反応 (不快)」が有意に少ないことが示された (順に  $R_{adj}=-2.35, p<.05$ ;  $R_{adj}=-2.87, p<.01$ )。また社会的トピックで一般社員が同意する場面では「感情的反応 (快)」が有意に多く ( $R_{adj}=4.39, p<.01$ )、「感情的反応 (不快)」は有意に少ないことが示された ( $R_{adj}=-2.55, p<.05$ )。

### 考 察

本研究は、所属性が異なる2集団 (内集団/外集団) の成員の同意・不同意場面において生じる情緒的反応の差異を、3つの仮説に焦点を当てて検証することを1つ目の目的とし、さらに社会的投射と情緒的反応との関係

Table 7. 各状況下で喚起される感情の自由記述回答の度数および小計パーセンテージ

		学生不同意				社員同意			
		学生トピック	社会的トピック	学生トピック	社会的トピック	学生トピック	社会的トピック	学生トピック	社会的トピック
無反応	無感情 (気にならない)	1	3.3%	0	0.0% †	7	21.2% **	1	3.7%
	納得 (受け入れ)	8		4		3		5	
認知的反応	疑問	3		5		1		0	
	意見の揺らぎ	3	46.7% **	0	34.6%	0	12.1% *	0	18.5%
	欽喜	0		0		5		3	
快	安心	0		0		8		7	
	自信 (優越)	0	0.0% **	0	0.0% **	4	51.5% **	7	63.0% **
	不快	4		4		0		1	
感情的反応	悲嘆	3		4		0		0	
	不安	3		3		2		1	
	自信喪失	1		1		0		0	
	戸惑い (驚き)	4		4		2		0	
	複雑 (アンビバレント)	0	50.0% †	1	65.4% **	1	15.2% **	2	14.8% *
計		30		26		33		27	

†  $p<.10$  \*  $p<.05$  \*\*  $p<.01$



について探索的に考察することを2つ目の目的とした。仮説は以下の通りであった。

仮説1. 外集団成員の同意は確信度を強化するだろう。またその傾向は、内集団の同意に対する確信度より強くなり、外集団成員に関与性が高い場合に顕著になるだろう。

仮説2. 内集団成員の不同意は確信度を低下させるだろう。またその傾向は、外集団の不同意に対する確信度より強くなり、内集団成員に関与性が高い場合に顕著になるだろう。

仮説3. 内集団成員の同意は安心を、不同意は不安を喚起するだろう。またその傾向は、外集団の同意・不同意に対するより強くなり、内集団成員に関与性が高い場合に顕著になるだろう。

情緒的反応を測定する尺度については、各状況下における因子分析の結果において一貫して「不安」因子、「自信」因子による2因子構造が得られ、さらに各因子の $\alpha$ 係数は十分な高さが得られたことから、情緒的反応の測定に使用した2つの尺度得点の信頼性が確認された。また内集団、外集団成員へのPSD得点には有意差が見られ、同学科の学生集団への心理的距離は、一般会社員集団に対する心理的距離より近く、親密さや一般的な類似性をより感じていることが確認された。

#### 各状況下における「自信」と「不安」

実験参加者に内集団、外集団成員から同意・不同意を受ける場面をトピックごとに想定してもらい、各状況における自信得点および不安得点を測定した結果、Figure 1、Figure 2に見られるように話題、投射対象、同意状況による情緒的反応の差異が確認された。

まず「自信」については、内集団、外集団の別なく多数の他者から同意を得られることに対して自信を高めること、また外集団に関与性の高い社会的トピックに関する同意を得るほうが、内集団に関与性の高い学生トピックに関する同意を得るよりも高い自信を示すことが明らかになった (Figure 1)。また内集団成員を対象として話題の効果を調べた単純主効果検定の結果においても社会的トピックのほうが学生トピックより有意に自信得点が高いという結果が得られた。以上から、仮説1のように外集団成員の同意は確信度を強化しているが、内集団からの同意との有意差は見られないことから三角測量効果と同様の効果が得られたわけではないと考えられ

る。また一般会社員を対象とした場合に、関与性の高い社会的トピックと関与性の低い学生トピックとの間に有意差が見られなかったことから、仮説1は部分的な支持にとどまったと考えられる。また仮説2が示すように内集団成員の不同意は自信を低下させているが、Orive (1988) による結果とは異なる結果を示している。Oriveは類似他者との同意は潜在的に仮定されることから自信の増加は見られないのに対して、不同意は自信を下げると指摘している。しかし本研究の結果は、内集団成員からの同意は外集団成員の同意と同様に自信を向上させており、不同意についても外集団成員と同様に自信を低下させている。Orive (1988) で扱った類似性は意見の一致、不一致に基づくのに対して、本研究では属性の違いによるPSDに基づいている。このような理由から集団間の差異が反映されない結果が得られた可能性がある。また同学科生を対象とした単純主効果検定において話題の有意差が見られ、学生トピックのほうが社会的トピックより自信得点が低下する結果が得られたが、話題の関与性と同意・不同意を示す対象との交互作用は見られなかったことから、明確な結果は得られていない。したがって仮説2についても部分的な支持にとどまっており、今後さらに詳細な検討が求められる。

なお同意状況下において社会的トピックと学生トピックを比較した場合、社会的トピックのほうが自信を上昇させ、また学生を対象とした際にも同様に社会的トピックのほうが自信を上昇させることについては、話題そのものの性質が関連した可能性がある。Goethals & Nelson (1973) 等において指摘されるとおり、何が正しいかという真理性が問われる所信 (belief) と、個人の主観的な価値意識が重視される好み (preference) に意見を区分するならば、社会的問題を反映する社会的トピックのほうが、より真理性に基づく妥当性が問われる内容であったと考えることができる。したがって話題の内容について、より精査することが必要である。

次に「不安」については、内集団、外集団の別なく対象者の多数が不同意の態度を示す状況下において不安が高くなることが示され、さらに単純主効果検定の結果、同学科生を対象とする場面では学生トピックのほうが社会的トピックより不安が高まること、また社会的トピックに関しては、同意・不同意を示す対象が学生であるほうが、一般会社員であるよりも不安が低下する傾向が示された (Figure 2)。以上の結果は、仮説3が示すよう

に内集団成員の同意は安心を、不同意は不安を感じる事が推測されるが、外集団成員との差異は認められない。したがって、仮説3についても十分な支持は得られなかったため、さらに検討を加える必要がある。

なお感情の自由記述データを分析した結果、感情反応が見られない「無反応」に分類される回答は一般社員が学生トピックに同意する場面で有意に多く、納得するあるいは疑問に思う、意見が揺らぐといった「認知的反応」は、同学科生が不同意な場面で有意に多く見られた。Goethal & Klein (2000) は、類似他者との不一致は非類似他者との不一致より意見の違いを受け入れがたいこと、また Orive (1988) は類似他者との一致は潜在的に仮定されていることを指摘しており、不一致な場合にはその仮定が覆される状態であることから疑問が生じ、認知的反応が多く回答されたことと整合すると解釈できよう。また感情の反応については快・不快に二分され、快感情は同意場面でのみ見られるのに対し、不快感情は同学科生の不同意場面だけでなく、一般社員が同意する場面でも少数見られたことには注意が必要であろう。このことは、心理的に距離のある存在である一般社員に同意されることに対する戸惑いや不安を示している。これらの反応は、90%以上の同意といった割合の高さに違和感を覚えた可能性が考えられる。

#### 合意推定値と「自信」「不安」感情との関係

トピックの種類(学生トピック/社会的トピック)と合意推定対象者(同学科生/一般社員)、同意状況(同意/不同意)を組み合わせた状況別に、「自信」「不安」感情を目的変数、自己意見に対する事前確信度、PSD、合意推定値を説明変数とする重回帰分析を行ない、合意性の推定といった認知的バイアスおよび各集団に知覚される心理的距離といった個人内変数の関連性を検討した。

重回帰分析の結果、「自信」については、学生トピックで同意が得られる場面において内集団、外集団どちらの対象についても合意推定値の標準偏回帰係数が有意となり、対象集団の違いに関わらず自己判断を集団成員に投射するほど自信を高めることが示された。しかし PSD は同学科生を対象とする場合にのみ有意となったことから、内集団成員に対する心理的距離の近さは、内集団に関与が高い話題における同学科生の同意場面において自信を強化させることが明らかになった。以上か

ら、内集団関与性が高い学生トピックでは、同学科生への社会的投射および PSD を介して自信を強化させること、また外集団からの同意についても外集団成員への社会的投射が自信を強化させ得ることが示唆された。一方、不同意状況ではすべての変数において自信に対する有意な効果は得られなかった。Table 4 が示すように、意見項目2を除く3項目において事前確信度と社会的投射とは有意な相関があり、事前確信度が高いほど対象への社会的投射が増加することを示している。社会的投射を行うことは自信の向上をもたらす方向において作用する一方、自信を低下させる方向においては作用しておらず、自信を向上させることを促進するバイアスとしての機能を持つ可能性が考えられる。今後さらなる検討が求められる。

また社会的トピックでは、同学科生からの同意が得られる場面において学生への PSD が有意な効果を持ち、一般社員からの同意が得られる場面では一般社員への合意推定値が有意傾向を示した。この結果は学生トピックの結果と異なり、学生にとって関与の低いテーマでは同学科生への社会的投射は確信を上げることに有意な効果をもたず、心理的距離の近さだけが効果をもつことを示している。これに対して一般社員への合意推定値は自信の大きさを予測する効果として有意傾向を示し、一般社員に関与性の高いテーマでの一般社員への社会的投射は自信を強化させる傾向があることが示唆されたといえよう。以上から、外集団関与性の高い社会的トピックにおいては外集団成員への社会的投射を媒介することにより自信を強化させる傾向が推測される。ただし決定係数は大きな値ではなく、一般社員を対象とした同意場面では非有意であったことから、今後十分なデータ数のもとで、モデルの適合性を含めてさらに検討を加える必要がある。

次に不安については、学生トピックで同学科生の同意が得られる場面では、事前確信度と同学科生への PSD が有意な負の効果をもつことから、自分の判断に対する自信が強いほど、また同学科生への心理的距離が近いほど、身近な同学科生から同意を得られることにより不安を低減させていることが明らかになった。一方、一般社員を対象として同意が得られた場面では有意な効果は見られず、学生トピックにおける一般社員からの同意は、不安・安心感には影響しないことが示唆された。また同学科生から不同意を得る場面においても事前確信度

の強さは負の有意傾向が見られることから、自分自身に関与性が高いテーマについては同学科生の不同意を受けられる場面であっても、不安が高まることはなくむしろ低下させる傾向があることを示している。一方、一般社員が不同意な場面では一般社員への合意推定値が有意な効果をもち、学生トピックについて一般社員が不同意な場面では、会社員への社会的投射が大きいほど不安が高まり、会社員への心理的距離が近いほど不安が高まる傾向があることが示された。学生の身近な話題において、関与性の低い一般社員の不同意が不安を高める効果を示したことから、三角測量効果と同様に、異なる視点をもつ集団成員からの不同意は不安感情の喚起をもたらすと考えられるであろう。また社会的トピックについて同学科生を対象とした場合、事前確信度の高さは同意・不同意の両場面では不安を低減させる効果をもつことが示されたが（不同意状況下は有意傾向）、一般社員に対しては有意な効果は見られなかった。さらに同学科生が不同意な場面では学生集団への社会的投射が大きいほど不安が高まることが示されたことから、関与性の高い話題よりむしろ関与性の低い話題において、内集団成員への社会的投射を介して不安が高まることになった。しかし次に述べるように、本実験のデータ数は十分な大きさはなく、今後さらに多くのデータにより検証を行うことが求められる。

#### 今後の課題

本研究は実験演習の課題として実施したデータに基づき分析したものであり、データ数が十分であったとはいえない。今後データ数を増やして検証を重ねる必要がある。また意見を測定する質問項目には意見分布の偏りが見られた項目が少なくなかったため、内容と質問項目数について、より精査することが求められる。

また本研究では仮説に対して明確な結果を得るには至っていないと考えられる。本研究は、所属性に伴う全般的な心理的距離の差異の観点から内集団、外集団を設定し、各集団に関与性の高い話題を取り上げて情緒的反応の差異を検討した。しかし情緒的反応に影響し得る対象や話題、場面設定の教示がなされていたかどうかなど、さらに精緻な検討に基づく設定が求められる。また自己の意見の妥当性を強化する比較他者として、どのような関係性に注目するかは、今後詳細な検討が必要である。

#### 引用文献

- Clement, R.W., & Krueger, J. (2002). Social categorization moderates social projection. *Journal of Experimental Social Psychology*, 38, 219-231.
- Festinger, L. (1950). Informal social communication. *Psychological Review*, 57, 271-282.
- Goethals, G.R., & Klein, W. M. (2000). Interpreting and inventing social reality. In J. Suls., & L., Wheeler (Eds.), *Handbook of social psychology. Theory and research*. Springer Science+Business Media. Pp.23-44.
- Goethals, G.R., & Nelson, R.E. (1973). Similarity in the influence process: The belief-value distinction. *Journal of Personality and Social Psychology*, 25, 1, 117-122.
- Jones, P.E. (2004). False consensus in social context: Differential projection and perceived social distance. *British Journal of Social Psychology*, 43, 417-429.
- Kelley, H. H. (1967). Attribution theory in social psychology. *Nebraska symposium on motivation*. 15, 192-238.
- Kruger, J. (2000). The projective perception of the social world. A building block of social comparison processes. In J. Suls., & L., Wheeler (Eds.), *Handbook of social psychology. Theory and research*. Springer Science+Business Media. Pp.323-351.
- Machunsky, M., Toma, C., Yzerbyt, V., & Corneille, O. (2014). Social projection increases for positive targets: Ascertaining the effect and exploring its antecedents. *Personality and Social Psychology Bulletin*. 40, 10, 1373-1388.
- Orive, R. (1988). Social projection and social comparison of opinions. *Journal of Personality and Social Psychology*, 54, 6, 953-964.
- Pyszczynski, Greenberg, Solomon, Arndt, & Schimel. (2004). Why do people need self-esteem? A theoretical and empirical review. *Psychological Bulletin*, 130, 435-468.
- Robbins, J.M., & Krueger, J.I. (2005). Social projection to ingroups and outgroups: A review and meta-analysis. *Personality and Social Psychology Review*, 9, 1, 32-47.
- Suls, J., Martin, R., & Wheeler, L. (2000). Three kinds of opinion comparison: The triadic model. *Personality and Social Psychology Review*, 4, 3, 219-237.
- 田村美恵 (2011). 葛藤的な集団間関係の下での合意性推定—性別集団を用いた予備的研究— 神戸大論叢 62, 5, 109-124.
- Yoshihara, C., Takamatsu, R., & Takai, J. (2018). Social projection to out-groups: Japanese students refer to psychologically distant others. *Journal of Pacific Rim Psychology*, 12, 1-9.